

## 論文の内容の要旨

氏名：金子千香

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

論文題名：Milton's Latin Poems: From the Pastoral to the Political

(ジョン・ミルトンの初期のラテン語詩群に関する研究)

学位申請者、金子千香は、2010年度日本大学文理学部英文学科に、野呂有子教授の御指導のもと提出した学士論文において、英国の児童文学における英雄像を探り、作品の主人公がキリスト教的英雄に成長するまでを描いた英雄叙事詩の系譜に位置づけられることを指摘し、その源流が英国叙事詩人ジョン・ミルトン作『楽園の喪失』(1667)にあると結論付けた。

ギリシア・ローマの古典作品において、神あるいは半神半人の行いが叙事詩の主題とされていたのに対し、ミルトンの叙事詩において人間(ひと)を中心とする叙事詩の伝統が始まったと考えられる。キリスト教的英雄像の誕生である。ここには、神と人間を分ける「死」をいかに受け入れるか、イエス・キリストを最上の模範とする英雄像が提示される。

叙事詩という形はとらずとも、「模範を示す」という叙事詩の役割は、今なお継承されている。今日、欧米においてキリスト教の影響が薄れつつあると言われているが、作家の多くが、読者に人生の模範を提示しようと努め、その姿は往々にしてキリスト教的有徳の人物で、『楽園の喪失』の英雄像に重なる部分がある。それゆえに、論者が求めたのは、文学作品における英雄像を見出すことで、その源たるミルトンの英雄観を明らかにすることである。

実に10歳にしてすでに詩人であったと言われるように、ミルトンは詩人としての大成を志し、早くから生涯を詩作研究の道に捧げ、詩歌の最高峰たる叙事詩創作を目標とした。『楽園の喪失』に繋がる母国語による叙事詩創作を心に決めたのは、ケンブリッジ大学在学の頃であったと推察されている。しかし、初めから叙事詩創作に着手したわけではなく、古典作品の模倣から始め、ラテン語牧歌、ラテン語小叙事詩、そして英語詩へと段階を踏んで進めていった。

すでにオウィディウス、ウェルギリウス、ホラティウスなどによるラテン語詩が全盛を極めたローマ時代から、ミルトンの時代まで優に1500年以上が経っており、ラテン語詩は完成された模範としてミルトンの前に示されていた。完璧な模範を暗誦するまで学び、それらを模倣し、そして創作する。ウェルギリウスが抒情詩『牧歌詩』、『農耕詩』から始め、叙事詩『アエネーイス』を完成させたことに倣い、ミルトンも牧歌詩から始め、詩歌の基礎を習得したうえで、叙事詩創作へと進んだ。このような段階を経た後に、ミルトンが英語による叙事詩創作を目標としたのは、完璧な古典の模範から学び、叙事詩の伝統が盤石ではなかった英詩の分野に新たな叙事詩の在り方を提示するためであった。

ミルトンの生涯は三段階に分けられ、学生時代から詩作研究時代は「牧歌時代」(-1639)、論客として活動した英国市民革命期は「散文時代」(1640-60)、そして王政復古後は「叙事詩時代」(1661-74)と呼ばれている。ラテン語詩は青年期の「牧歌時代」において精力的に執筆された。特に、1626年はケンブリッジ大学の教職者の「死」を題材とした4篇と「火薬陰謀事件」を題材にした6篇を含む計11篇が創作され、同期間において最も実り多き一年であった。1629年以降、英詩創作への傾向が高まる中で、1638年から1639年の大陸旅行に際し6篇のラテン語詩が創作された。イタリアの文学者たちから与えられた称賛(Poemata)は『詩集』の巻頭に自信を持って掲げられている。青年ミルトンが初めてイタリアの文芸界から称賛を得たのは、当時の国際共通語ラテン語によって綴られた詩に対してであった。そして牧歌時代の結びの作品に位置づけられる『ダモンの墓碑銘』(1639)もラテン語詩である。以後、ミルトンは英国市民革命期の政治論文の執筆を中心に活動し始めることとなる。

ミルトンは散文時代の最中、青年期の詩作品をまとめて1645年版『詩集』(*The Poems of John Milton, both English and Latin compos'd at several times*)を出版した。タイトルが示す通り、第一部に英詩、第二部にラテン語詩が収められている。

本論は、1645年版『詩集』に収録された25篇のラテン語詩において、第一に「叙事詩人としての大成」が神への祈願という形で綴られていること、第二に政治家、宗教家に劣らぬ「詩人の役割」が提示されていることを指摘する。

まず、「カルミナ」(1645年版詩集未収録作品)、「第一エレジー」、「第五エレジー」、『父にあてて』、『マンソウ』、そして『ダモンの墓碑銘』において、「叙事詩人として立つ」というミルトンの決意の段階的発展を、詩歌の神ポイボスに着目しつつ、跡づけていく。ミルトンは、常に自らをポイボスの信奉者として描き、詩作を神への奉仕であると語っている。神への奉仕の一つ一つが、詩人を詩歌の神に近づけていく。信仰に目覚め、平信徒、巡礼者として、詩歌の神に仕える姿勢が段階的に描出される。さらにミルトンは詩歌の世界において、神の子の系譜に連なることになる。それは、ミルトンが自らを詩神の才能の正統な継承者として、さらに養い子として位置付け、詩神と自身の関係に「父と子」の関係を適用するところに見出される。一方で、ラテン語詩全体が、詩歌を「牧場」、詩神ポイボスを「牧人」、そして詩人自身を「羊」になぞらえた牧歌的風景を背景として展開されることにも注目する。最終的に、詩歌の神に倣いて、詩人自ら「牧人」として新たな世界(つまり政治論争の世界)に歩を進めるに至る。したがって、ミルトンが牧歌時代を通じて叙事詩創作の意欲を抱き続けたことが、ラテン語詩中の詩歌の神に一心、一身に仕える信仰厚き信徒の姿に見出されることとなる。ちなみに、ミルトンのラテン語詩を通時的に扱った研究は、日本国内はもとより、海外でもほとんどみられない。

さらに、ミルトンは『教会統治の理由』(1642)において、詩人の役割を説教家の役割と比べて次のように語っている。

詩人は説教壇の役割とは別に、偉大なる国民に美德とよき市民たる自覚をつちかい、心の乱れをしずめ、感情を正道にもどし、輝かしい高邁の祝歌をうたって全能なる神の栄光の玉座をほめたたえ、…信仰に立ちつつ勇敢にキリストの敵に刃向う正しく敬虔な国民の行為と勝利をうたい、王国や国々が正義や神の真の礼拝から後退していく一般的状況を悲しむものであります。

(『教会統治の理由』新井明、田中浩訳、未来社、1986、p.104)

ミルトンは詩人の国家における役割が、為政者の役割に劣ることなく、むしろ為政者が悪の道に逸れた場合に、それを正すことが詩人の役目であると言う。本論は、このような詩人としての自覚が、ラテン語詩においても見出されることを英国救済史の一つに位置づけられる「火薬陰謀事件」を題材とした6篇の連作詩をもとに考察する。本作品における敵対者のイメージの詳細な造形が、相対する英雄像の存在を窺わせる。敵対者は悪魔に唆され、異教に陥るローマ・カトリックの長たる教皇で、英雄は信仰厚き英国国民である。その中に、カトリック信仰に傾倒する、国王チャールズ一世に対する批判が込められていると考えられる。やがては『イングランド国民のための弁護論』において開花する国民英雄像の萌芽が、敵対者の造形を通して見出せる。そのために、火薬陰謀事件に関する当時の言説を探り、ミルトンの「火薬陰謀事件」連作詩が、当時の英国の宗教的動向と深く関わっていることを検証する。当時の言説については、*Early English Books Online*を用いて1605年から1642年間の出版物、及び説教集に基づいて考察を行う。ミルトンは、前政権から現政権を通じて事件後20年以上に渡り意図的に築き上げられた国王英雄像を打ち崩し、敵対者の造形を通して国民英雄像を描き出す。そして、ラテン語詩において芽生えたミルトンの国民英雄像が、英語散文『教会統治の理由』、ラテン語散文『イングランド国民のための第一弁護論』(1651)において育まれていくことを跡付けていく。これまで「火薬陰謀事件」連作詩を上述の視点で考察したものはないように思われる。

最後に、本論の第一目的、第二目的の点から見て、詩人として「正しき模範に倣いて」という意識がラテン語詩群の根底に流れていることが明らかとなる。The Covenant of the LawとThe Covenant of Graceに言及しつつ、ミルトンの「正しき模範に倣いて」という思考の型を育んだ言説圏を考察する。

このようにして、本稿は、ミルトンの1645年版『詩集』が「叙事詩人としての大成」を願う祈りを込めて綴られたことを、ラテン語詩群に焦点を当てつつ、明らかにする。それは詩歌を「牧場」、詩神ポイボスを「牧人」、そして詩人自らを「羊」になぞらえた牧歌的風景の中に見出されることとなる。詩歌の牧場において、詩人は次なる段階(政治論争の世界)へ歩を進める準備を整え、為政者(政治家、宗教家)の役割に、相対する詩人の国政に係る役割を提示していると考えられる。